

幼稚園は初年教育に對して如何に準備するか

マリー、ジー、ウエイト

幼稚園に上る頃から、學校教育の最上級を出るまでの間、教育には途切れとか斷絶とかは起てはならない、と言ふのが教師間に一致した考である。

この學校生活に生ずる或る斷絶——殊に幼稚園と一年級の間、小學校とハイスクールの間、ハイスクールから大學への間を生ずる——を根絶する唯一の道は、學級の段階的連續と、それ以前の段階の完成を必要とする事である。幼稚園と初年級は屢々反對の目的に働いてゐるといふ非難をうけてゐる。しかし之等の相違は教育過程に於て幼稚園と小學校の理想と實際、即ち其の眞の教育の意義や、立場に就ての理解が進むに従て速かに消滅するのである。

幼稚園には其仕事の一定の部分を自然に形造つてゐる、多くの技巧習慣があるけれど、それは幼兒の心をまづ第一にとらへるものではない。尤も之等の習慣が偶然仕事の中には入て來る場合には、幼兒はそれを用ふように獎勵されなければならぬ。たとへば建物の内外には幼兒が知らなければならぬ。種々のしるし——校長室、女兒、男兒、入口、出口、十二室、車止、大通、消防署、合衆國郵便局等——がある。技巧の方面には多くの注意をひく事はないとしても、初歩の仕事の他の二方面は兒童の意識的注意をひき、その基礎をなす兒童の知識を増蓄し、又それについての興味を發達せしむる爲に、十分の機會を與へるように計られる。

讀方

かりに讀方といふものが、表はされたものを理解する爲にシムボルを述べる可能性といふ意味であるとしたならば、極く幼ない小兒も讀めるといふ事が言へる。しかしかような讀み方は印刷された紙上の文字を讀むように學ぶ、ほんの初歩である。兒童は畫と身振を解する事を早くから學ぶ、即ち彼等は彼等が見たことの意味を話すように學ぶ。「目からは入る事實を認識する能力は思考能力を造る」とデウエー先生は言はれた。又「兒童は訓練せずとも自然に六七歳の頃になると繪畫に關して此の可能力を發展する」とビネー氏は言てゐる。それで彼は七歳の知能検査にそれを用ひてゐる。幼稚園に於て兒童は自分の畫と名畫との兩者を解釋する事が出来る。他のシムボルを解釋するには劇的の仕事と表情遊戯がある。身振は常に通信の方法であつて、現代でもなほ身振以外の仕方では他部落と通信の出来ない部落がある。そしてこの通信の二方法は、幼稚園に於ける幼兒の生活のごく自然なものである。

事の成行に就ての感情の發展

讀み方は、知的本意のものと興味本意のものに分けられるが、小さい兒童にとつては後者はお話の形式になる。幼稚園に於てお話の愛好心が養成され、そして幼兒日々の經驗の部分を形造する。多くのお話を聞くばかりでなく、一つ／＼が幾度も話されるし、又其時の場合や気分によつて、それに適した新しいものが發明もされる。かような方法で兒童は豊富な語集を收得し、又出來事の成行に對する情緒をも養ふ。幼稚園ではお話に依て觀念と語集の連續といふ事に力を入れるばかりでなく、又會話に依て意識的に語集を發展せしめる。おそらく幼稚園の會話は小學校の教師から最も誤解される處の幼稚園の仕事であらう。會話に依ると言ふ事は、單に社交的な話の爲のみではなく、それもみとめられるのであるが、

ある題目に對して、自分の意見他人の意見を述べ合ひ、お互に影響を受け合ふ、眞に會話それ自身の爲の會話である。又幼兒は會話に依て、他兒又は教師から得た斷片的な知識と智識とをつなぎ合せ、更に新しい廣い考への組み立てをする。これは兒童が字に就て、彼等の觀念が正しいかどうかを見得る一つの方法である。

英語の正しい用法に適した音を解するといふ事も亦、會話に於ける最も大切な事である。そして聲音の遊や話し方はゆるがせにしてはならない。幼稚園には之等の爲に計畫された多くのゲームがある。意識的に用ひられはしないが、之等の遊びは、讀方の技巧の殆ど直接練習として考へられてゐる。

幼稚園に於て多様な方法で用ひられて居り、そして讀方に必要な他の技巧は、一目で出来る丈見るといふ事である。心理學者や生理學者は、吾々を見る能力を増加させる事は出来ないといふが、彼等はまた、我々の持つてゐる能力を全部使ふ人は恐らく一人もあるまいとも言つて居る。事物の群團といふ事と認識といふ事に就て、或結果を増す爲に注意のゲームといふのが幼稚園にある。これは初年級で強められ、更に眼界を廣め、又讀方の際、目の使ひ方が敏捷になる爲に用ひられる。

數 學

數に就ての仕事は、幼稚園の他の諸活動に比して、著しく學校の爲の基礎として準備されてゐる様に見える。極く小さい兒童でも數の組合の用法を理解する必要がある。三歳の子が、「トムとポピーと私のにするのだからお菓子を二つ二つと二つ頂戴」と言つたのは、表現すべき言葉は知らなかつたけれど、其の子は二の三倍の價值を知てゐるのである。

數の關係は材料を用ふる處では、どこでも容易に實例を示す事が出来る。數の課業の二つの至要な要素は、事物をグループにして見る事と、後へも前へも續けて數へ得る事とである。幼稚園の幼兒は事物をグループにして見るのに多くの機

會を持つてゐる。幼兒は籠、首飾、タホル、ナブキンの模様を作り、又お祭の衣裳を飾り又種子や球根をグループにしたり、列にしたりして花壇に植える。子供達が、あるゲームをしてゐる時に、二、三、五、八、人のグループの子供は、其の特種なゲームに必要であり、又指揮者は屢々「さあ次の三人の番です」と言たりする。兒童の多くの仕事の中で、數へるといふは必要な事である。彼等はいくつの椅子、何枚の紙、何個の鉢、或は他の必要な材料が要るかを知らなければならぬ。やさしい數へ方は二、三のグループでリズム的に進展する又或時は四又は五でも出来る。これは玉や鎖やテープル飾りや木片のかきねや、其他多くの模様に依て實例を示される。

數の基礎學習

加算と乗算は、連續した數へ方の縮んだ型である。幼稚園の子供は、之等の數の連續に就て基礎的な事實を學ぶ。グループを成してゐる事物、それは乘法の基礎である。かのリズム的な數へ方の實例の如き、かような種類の多くの經驗を兒童が持つてゐると言ふ事は、吾々のよく知る事である。兒童は、二或は三のグループの爲に、ある事物がいくつ必要かを見る爲にかぞへるといふ事もある。彼等は又極く簡單な方法での割算も知る必要がある。二人で一つの糊皿を使ふ時には、皆でいくつ要るか、又半數の兒童にくばるにはいくついるか等といふ事は、日常に關係ある實地問題である。數の仕事は課業としては見なされないが、其場合のゲームとか問題の附隨物として取扱はれる。然しそれは決して偶然に生じた事ではない。賢い教師は他の場合と同様、智識の發達に依て起るあらゆる機會を用ひ、又これが他の仕事と隨伴的に生ずる様に計る。それ故幼兒は、他の仕事を實行しながら數へる事に依て、簡單な數に就て經驗し、遂には一つづゝ加へたり減じたりする様な、ごく簡單な數の連續に就いて、ある知識を得るに至る。

書 方

人間は從來のシムボルで書く様になつた以前に、他人へ意志を表したといふ記録を持つてゐる。そしてそれに依て言語のわからない人と通信をする事が出来たのであるが、兒童に就ても亦之と同様で、考を表すのに在來の記號を用ふる様になる前に、他のシムボルで表はす。其の最も初は泣くといふ事で其以外には身振がある。赤ん坊は、食物の足りた時に頭をふり向ける。暫くするとシヤベルを欲する意を表はす爲に、空で手をうごかす。かくして幼稚園へ上るまでには、幼兒は多くの事を學んでゐるが、然し彼等はまだ身振の方が言語よりも用ひられる状態にある。彼等は多くの考へや情緒を動作であらはさなければならぬ。かくて、お話、會話、劇遊、身振、狂言は殆ど書く事畫く事と同じ表現形式のように、通信の前提的形式として大切なものである。

兒童は自分の考を傳へるのに、屢々畫く事をする。子猫と人との話をする時に、人を表はす大きい圓と猫を表はす小さい圓の位置を換へる事に依て話をする子供は、目のシムボルを使ふ事に於て、意志の發表になれてゐるのである。觀念發表は幼稚園の畫方の最上の理由である。ある技巧は、之等の考の正しい發表にとつて必要である。紙面の底邊を横ぎる線は平く見え、上下の線は地面を暗示し、同時に斜線は雨を表はす。子供が最もよく考を表はす線を作るのに技巧を要する時には、兒童をして自由に之等の線を畫かせれば、自づとよい工夫が生み出される。モンテツソリーは此の最初の工夫の一として形板を用ふ。そこでは活動は鉛筆の動く場所に依て限られる。幼稚園の兒童は形板に制限されずと同様の活動をする。

畫の要素の多種の形が同じ様にして作られる。之等の練習は書くのと同じ動作を含む。そしてこの二つの場合に於て方法或は内容が一致してゐる時には習慣を生ぜしめ得ると、心理學者は言つてゐる。故に幼稚園の自由畫に使はれた技巧は

あたかも一年級の書方の技巧の基礎を形造るかの様に見える。

地 理

地理學習は、自然及び兒童各自の環境の地理から始められなければならない、とはすべての地理科の教師の一致する處である。此の種の地理學習は、幼稚園に於て非常に力強く行はれてゐる。勿論我々は兒童が地圖を讀んだり、日や星や、コムパスで方向を指したりする事を豫期してはゐないが、然し我々は彼等が各自、或は團體としての地理的經驗の組立てに依て、彼等の興味をひろめ且つ或る物質的事實の知識を増す事を見出す。例をあげれば、方向といふ題目の下に、兒童の必要に應じて或事實が學ばれ、又次の如き提案に依てそれが組織立てられて行くといふ事を見出す。即ち

「お家から學校まで、どうして來ましたか？」

「どうしたら百貨店へ行けますか？」

「お母さんの郵便を入れるのには何處のポストに行きますか？」

「お家から學校までは、どんなに遠いのですか？」

「歩くところまで、お父さんと一處に來ますか？」

「公園へ行く時には、お祖母さんの所へ行くのと同じ道を行きますか？」等。

兒童が理解し得る他の事實は、雨が軒から落ちる状態、學校の芝生から道路の方へ強雨が澤山の土を運ぶこと。多くの食物、衣類や家屋の材料は他所から持つて來ること。そして之等の物は我々が近所から直ぐ買ふ時とは全然違つた形をしてゐる事。又之等を我々に送つてよこす人々は交換として我々の持つてゐる他の物を要すること。之等の物は汽車、自動車、ボート、飛行機で運ばれる事等である。

幼稚園は初年教育に對して如何に準備するか

季節の變化は、小さい兒童にとつては非常に意味の深いものであつて又幼稚園要目の基礎の大部分を形成して居るのである。燃料が、どこから來て、どういふ具合に産出されるかといふ事は、兒童にとつて、常に興味ある事である。

冬中何處に鳥が住んでゐるか、何故母が秋には食物を蓄へるか、何處から暖い着物の材料が來るか、窓に飾る花をどうして造るか、我々のパンを造る爲にパン屋は、何處であの澤山の粉を得て來るか、等は幼兒の心に、たえず起る處の問題であつて、會話やお話、討論、構成、活動又幼稚園の自然の仕事に依て部分的に答へられつゝある處の問題である。

地理的知識の増進すると共に、幼稚園の教師は、我々の持つてゐない事物を送ってくれる人々が、如何なる生活をしてゐるか、そして我々に送つたその交換として何をしたらいいかと言ふ事に就て、自然的に興味を養ふようにする。

他の地理的の事物の中に兒童は良い道路の價值といふものを學ぶ。學校へ通ふのに土の上を歩くより。ベープした道を行く事は大層樂なことである。

然し地理に關して兒童の得るすべての物の中で、最も大切な事は、我々に接近した人々や事物と同様に未知の事物に對しての驚異の感じである。

初年級と幼稚園とを間は、賢い教師は之を出來る丈利用して、これらの珍らしい、不思議な事物に就て、もつと發見をする様に、兒童の工案を活動的に發展せしむ。

結 論

幼稚園の幼兒は、基礎的知識とそれに就ての興味を刺戟する經驗を必要とするが、彼等によつて初年級の準備といふものは前者ほど必要ではない。

故に幼稚園では、多種多様な經驗を與へる事に依り又それを組立て、彼等の根本的興味と觀念とを結び付ける様に、補ける事に依て、初等學校の學課教授の爲に必要な多くの準備的材料を供給するのである。